

独思録：「駿河湾地震」(8/16)

小西 秀俊

esq-info@esquare-kamakura.net

8月15日の終戦記念日に、政府主催の全国戦没者追悼式が天皇、皇后両陛下列席のもと東京都千代田区の日本武道館で開かれましたが、各紙の扱いは全米オープンゴルフ大会における石川遼選手の予選突破の方が大きく感じ入れ、改めて、世界大戦の風化が感じられました。

しかし、地震の扱いは別、現実に関今自分にも降りかかる「地震・雷・火事・親父」の怖い筆頭の災害に国民は敏感で、各紙も大きくトップで取り上げています。

寺田寅彦のエッセイ「静岡地震被害見学記」に、

「昭和十年七月十一日午後五時二十五分頃、本州中部地方関東地方から近畿地方東半部へかけてかなりな地震が感ぜられた。静岡の南東久能山（くのうざん）の麓をめぐる二、三の村落や清水市の一部では相当潰家（つぶれや）もあり人死（ひとじに）もあった。しかし破壊的地震としては極めて局部的なものであって、先達（せんだつ）での台湾地震などとは比較にならないほど小規模なものであった。

新聞では例によって話が大きく伝えられたようである。新聞編輯者は事実の客観的真相を忠実に伝えるというよりも読者のために「感じを出す」ことの方により多く熱心である。それで自然損害の一番ひどい局部だけを捜し歩いて、その写真を大きく紙面一杯に並べ立てるから、読者の受ける印象ではあたかも静岡全市並びに附近一帯が全部丸潰れになったような風に漠然と感ぜられるのである。このように、読者を欺すという悪意は少しもなく、しかも結果において読者を欺すのが新聞のテクニックなのである。」と書かれています。

今回の駿河湾を震源とする最大震度6弱を観測した大きな地震で、路肩が崩落した東名高速の復旧工事に、連日、大きく取り上げています。

寺田寅彦のエッセイの云う「読者を欺すという悪意は少しもなく、しかも結果において読者を欺すのが新聞のテクニックなのである。」なのでしょうか。

「その写真を連日紙面一杯に掲載し、盛り土の土台が当初の想定以上に緩んでいることがわかり、工法変更を余儀なくされた。

今回の崩落と応急工事の難航は、老朽化が進む東名高速に大きな課題を突きつけた。」とあり、結局、

「このように、忠実に伝えるというよりも読者のために「感じを出す」ことの方により多く熱心で、読者の受ける印象では、あたかも、東名高速全部が、老朽化が進んだような風に漠然と感ぜられるのである。」

となります。

更に、「中日本高速道路が、学識経験者らでつくる調査委員会を近く立ち上げ、詳しい崩落原因を調べる方針を明らかにした」ことについても、ことさら東名高速が、老朽化が進

んだ印象を読者に与えているような気がします。

今回の地震の被害が東名高速以外、地震規模に対し少なかったことは、静岡県の自治体や住民の耐震に対する意識が高く、十分な備えがあったのに対し、最も地震に強くあるべき東名高速の備えが十分でなかったという、老朽化以前の皮肉な結果を見せ付けた感じがします。

気象庁は東海地震との関連を調べるため、地震の専門家らで作る「地震防災対策強化地域判定会」の臨時的打ち合わせ会を初めて開き、検討した結果、東海地震に結びつく変化ではないと判断したそうですが、東海地震は、忘れた頃にはなく、何時起きても不思議ではないそうで、十分に物心両面で準備（覚悟）をしておく必要はあるようです。

日経：「静岡で震度6弱、負傷60人超」(8/11)

11 日午前5時7分ごろ、東海地方を中心に広い範囲で地震があり、静岡県中部や西部、伊豆地方で震度6弱を観測した。気象庁は地震の規模や発生メカニズムが異なることから「想定される東海地震ではない」と判断。同地震との関連を調べるための臨時会議を初めて開いたうえで「東海地震に結びつくものではない」と説明した。この地震で東名高速道路が一部通行止めになるなどお盆の交通網にも大きな影響が出た。

総務省消防庁によると、午後0時15分現在、確認されている負傷者は静岡県で63人、愛知県で3人、神奈川県で2人の計68人。警察庁は正午現在で死者、行方不明者は把握していないが、落下物や転倒による骨折などで5人が重傷としている。

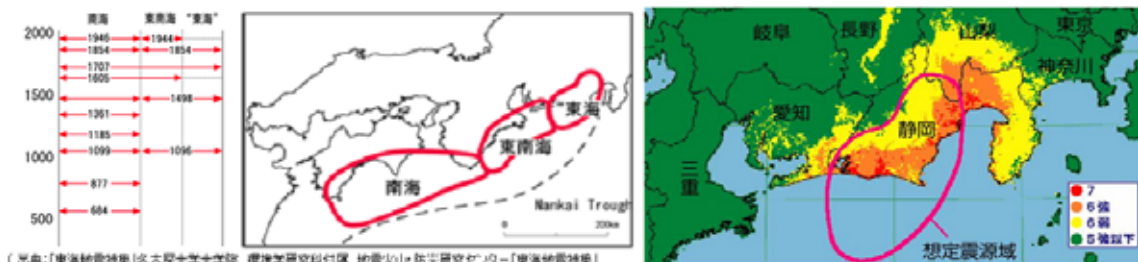


地震で陥没部分が崩壊した東名高速上り線＝11日午前5時50分、静岡県牧之原市、朝日新聞社へJ. 午前6時54分、加藤文則撮影
壁面崩壊の壁が倒れた＝静岡市東区逢子町、午前6時54分、朝日新聞社へJ. 午前6時54分、加藤文則撮影
地震の揺れで、棚の商品が散乱した＝11日午前5時20分、静岡市東区七郎町のコンビニエンスストア、(撮影:朝日新聞)

<東海地震>

静岡県西部・駿河湾一帯を震源とするプレート型地震。マグニチュード8クラスの巨大地震で、神奈川県から愛知県にかけての広い範囲で強い揺れが起こり、津波での大きな被害も起きると想定されています。

他にも、東南海、南海、合わせて3つの地震を地震3兄弟とも言われ、百数十年のサイクルで起こっているようにも考えられています。



(出典:「東海地震特集」なる星大大学院 環境学研究所付属 地震火山・防災研究センター「東海地震特集」)

春秋：「山崩れ河湧く」(8/12)

天武天皇の治世、684年に四国の南岸を激しい揺れが襲った。「国拳(こぞ)りて男女叫び、唱(よば)いてまどいぬ。すなわち山崩れ河湧(わ)く」とは日本書紀の生々しい描写だ。列島の太平洋側で繰り返される巨大地震についての最古の記録だという。

同じ時期には東海地震も起きたようだから、古代の人々の恐怖はどれほどだったろう。歴史をたどれば、その後も100年から150年の周期で発生してきた東海・東南海・南海の災厄だ。ただし20世紀以降、東海だけは一度も起きていない。したがって今後30年以内の発生確率は87%、という深刻な予測がある。

それだけに、駿河湾が震源のきのうの地震は何とも不気味だった。グラリときて明け方の眠りを破られ、速報を聞けば御前崎などで震度6弱。思わず身構えた人もおられよう。規模もメカニズムも違うから東海地震には結びつかないと気象庁は説くが、関連を見極めるべきだという専門家もいて不安はぬぐえない。

どちらにしても、やがては東海の巨大な揺れにも見舞われると覚悟するしかない地震国である。「国拳りて男女叫び、山崩れ……」。古代から幾度も体験してきたこんな光景を乗り越える知恵と行動を持ちたい。路肩をざっくりと削り取られた東名高速道路の惨状が、一段の備えを促していることだけはたしかだ。

<天武天皇(631? - 686)>

『皇統譜』によると第40代天皇(在位:673-686)。漢風諡号、天武天皇は代々の天皇とともに淡海三船により「天は武王を立てて悪しき王(紂王)を滅ぼした」から名付けられたとされる。即位前の名は大海人皇子(おおあまのみこ)。



壬申の乱で天智天皇の息子である大友皇子(弘文天皇)を破り、飛鳥浄御原宮で即位。即位後は飛鳥浄御原令の制定を命じ律令国家の確立を目指し、官僚機構を整備、大舎人の門戸には官人のみならず庶民にも門戸を開き八色の姓を制定など、皇親政治を徹底。

外交面においては新羅の朝鮮半島統一(676年)により新羅使の来朝を受け遣新羅使を派遣、新羅との国交保持のため新羅と対立していた唐との国交を断絶した。

天声人語：「天変地異」(8/12)

この世界のことを「天地」と書いて「あめつち」と読む。そこからの連想だろうか、古くには「天地の袋」という縁起物があって、女子が新春を祝って作ったそうだ。幸福を中に入れて逃がさぬようにと、上も下も縫い合わせたという。

天地のはざまに人は住み、世界には多彩な幸がある。一方で、あれやこれやの災いも多い。「天変地異」はその最たるものだ。台風という天変を心配して床に就いたら、朝早くに地異で跳び起きた。「すわ東海地震か」と肝をつぶした人も多かったのではないか。

駿河湾を震源とする地震は、静岡県を中心に広い地域を襲った。台風が来ているからと遠慮することなく、雨にゆるむ国土を最大震度6弱で揺さぶった。東名高速道の路肩がざっくりとえぐられた。

きのうの小欄は天変について書いた。空の変調もときに急激で、たとえば「三杯雷」という言葉がある。雷鳴を聞くと飯を三杯食べる間に土砂降りになる。そんな戒めだという。だが地震にはその間もない。常に背後からの辻斬(つじぎ)りさながらだ。

おとといの小欄に引いた寺田寅彦は、防災の大切さを説く警世家でもあった。日本の自然には「慈母の愛」と「厳父の厳しさ」があると述べ、愛に甘えて厳を忘れると痛い目に遭うと警告を残している。

天変も地異も、はるか太古からの地球の営みだ。きのうの揺れは東海地震の前兆ではないようだが油断はならない。天地のはざまに間借りするわれわれ次第で、被害は増えも減りもする。怠ってはいないかという、厳父からの忠告かもしれない。

< 寺田寅彦 (1878-1935) >

随筆家、地球物理学者。東京市麹町区(現在の千代田区)生まれ。東京帝国大学卒。

航空研究所、理化学研究所、地震研究所、東京帝国大学(教授)などに所属、大正12年(1923)45才の時、関東大震災に遭遇し、火災旋風などの調査に従事する。



「天災は忘れた頃に来る」という言葉を言い出したのは寺田寅彦であるといわれている。

漱石の門下生でもあり、吉村冬彦の筆名で数多くの随筆を書いている。

作品に『漫画と科学』『科学と文学』『西鶴と科学』『珈琲哲学序説』『神話と地球物理学』などがある。

編集手帳：「地震の怖さ」(8/12)

書物を詠んだ短歌のなかでは異彩を放つ一首だろう。歌人の道浦母都子（もとこ）さんに阪神大震災の歌がある。本は凶器 本本本本本本本本本 本の雪崩（朝日出版社刊「悲傷と鎮魂」より）。

誇張ではないことをきのう、静岡県を襲った震度6弱の地震で知る。会社員の女性が自宅で大量の本に埋もれて死亡しているのが見つかった。死因との関連はまだ分からないが、本は普段、床に積み上げていたという。

本、食器、あるいはテレビと、身の回りの品が突然、凶器に変じて牙をむくのが地震の怖さだろう。負傷者は100人を超えた。西日本で大雨が多くの人命を奪ったばかり、自然の猛威がつづく。

宇宙から届く若田光一さんの映像に拍手し、皆既日食に息をのみ、天の高みを仰いで胸をときめかせた夏である。遠くは見えても1秒後の未来が見えない。

人は山と蟻（あり）の中間だ。アメリカ先住民オノンダガ族の格言という。自然の前で人間は微小の存在にすぎないのだと、説いた言葉だろう。そのことを現代人に諭すのなら、もっと穏やかな諭し方があろうにと、荒ぶる天地に恨み言を告げずにはいられない。

< 若田光一（1963-） >

宇宙航空研究開発機構(JAXA)所属の宇宙飛行士。工学博士。埼玉県大宮市（現さいたま市北区）出身。九州大学大学院修了。

1992年旧・NASDAによりミッションスペシャリスト（MS）候補に選出。

1996年スペースシャトル・エンデバー号による「STS-72」ミッションに日本人初のMSとして参加。

スペースシャトルに搭載されているロボットアームを操作して宇宙空間に浮遊する宇宙実験・観測フリーフライヤー(SFU)回収に成功。

2000年の2度目のミッションでは国際宇宙ステーション（ISS）の組立、今年の3度目のミッションでは日本人宇宙飛行士としては初のISS長期滞在を経験した。



余録：「明け方の震度6弱」(8/12)

駐日大使をつとめたフランスの詩人P・クローデルは東京着任以来、ひっきりなしに起こる地震についてこう書いた。「自分たちが、実は葉叢（はむら）や花々の下で半ば眠っているキュクロペス（ギリシャ神話の巨人）に迎えられた客であることを理解したのである」。

だがそれもほんの序の口、彼はその後関東大震災に遭遇する。「大津波、台風、火山の噴火、地震、大洪水などたえず何か大災害にさらされた日本は、地球上のどの地域より危険な国であり、つねに警戒を怠ることのできない国である」（「朝日の中の黒い鳥」講談社学術文庫）。

詩人の警告を思い出させたのは、台風9号通過で大雨の警戒が続く静岡県を襲った震度6弱の地震だった。揺れの大きい伊豆市では、8月の観測史上最大雨量を記録している。地震による大規模な土砂災害を免れたのは僥倖（ぎょうこう）かもしれない。

駿河湾を震源とする強い地震といえば、頭をよぎるのは東海地震だ。現地でも大きな揺れに「いよいよ来たか」の声も飛び交ったという。気象庁は東海地震との関連調査のため初めて東海地震観測情報を発表し、判定会の臨時会を招集した。

今回の地震の規模は想定される東海地震よりはるかに小さく、発生の仕組みも異なるという。つまりは「東海地震と関連はない」と断定された。だが地震のメカニズムはどうあれ「つねに警戒を怠ることのできない国」の実情には変わらない。

災害の危険に満ちた国土を日本人が熱烈に愛していることをクローデルは見逃していない。だがその愛情は信頼の念とは違いと述べている。愛しても注意は欠かせぬ列島の住人の宿命を改めて心に刻ませた明け方の揺れだ。

<ポール・クローデル（1868-1955）>

フランスの劇作家、詩人、外交官。北フランス、エーヌ県の一小村生まれ。

1882年以來パリに住み、政治学を学びながら実証主義、象徴主義など世紀末の諸思潮の洗礼を受ける。

やがて、マラルメやワーグナー、アイスキロスやシェークスピアなどの影響下で、劇作に着手、『黄金の頭』（1890初稿・刊）『都市』（1893初稿・刊）などを発表。

1890年外交官試験に合格、アメリカを振り出しに長い諸外国での外交官生活を始め、1921年（大正10）駐日大使として東京に赴任、関東大震災を体験する。

他に『交換』『真昼に分かつ』『マリアへのお告げ』『人質』『硬いパン』『凌辱された神父』『繻子の靴』『クリストファー・コロンブスの書』『火刑台上のジャンヌ・ダルク』など。



<キュクロペス>

ギリシア神話に登場する卓越した鍛冶技術を持つ単眼の巨人。ホメロスの叙事詩『オデュッセイア』では、旅人を食らうただ粗暴なだけの怪物として描かれている。

父神に嫌われ、奈落タルタロスへ落とされ、久しく拘禁されたままであったが、ゼウス達によって解放される。キュクロプスはその礼として、ゼウスには雷霆（らいいてい）を、ポセイドーンには三叉の銚（さんさ-の-もり）を、ハーデースには隠れ兜を造った。

ミュケーナイ文明が栄えた大掛かりな巨石建造物の数々は、巨人キュクロペスの手になるものと考えられており、「キュクロペスの石造物（Cyclopean masonry）」と呼ばれている。

